

川上宏奨学基金報告書

題目「メディアとしての児童文学——継承と記憶をめぐる歴史社会学」

川上宏奨学基金を頂き、卒業論文「メディアとしての児童文学——継承と記憶をめぐる歴史社会学」を書き上げることができた。論文の内容と調査の概要について報告する。

1. 卒業論文要旨

戦後 70 年以上経た現代社会において、従来の「受動的」といわれる平和教育ではない新たな形を求める必要があるのではないかという問題意識が研究動機になっている。

この問題意識に対し、本論文では、平和教育の受け手である「子ども」を軸に、戦前戦後と子どもが触れて来た文化の一つである「児童文学」に焦点をあてた。すると先行研究では、戦前、児童文学作品を含めた、対子どものメディアにも「プロパガンダ性」が存在し、その影響は、当時の日本社会形成に関与していたということが明らかにされていた。

そのことを踏まえるならば、戦後「児童文学」は先に挙げた「平和教育」の手段の一つになり、「反戦」「民主化」を訴える教材として成立していたことは、対子どものメディアとしての側面である、「プロパガンダ」としての性格が、戦後の平和教育にも通じていると考える事ができると考えた。

このことから、まず本論文では第 1 に、戦前・戦後における同一メディア（児童文学）の内容の矛盾から、「煽動」、「教育」の手段に成りうるという「メディアの二面性」を示そうとした。

そして第 2 に、これらを、従来の児童文学研究と同じく文学的視点ではなく、歴史社会的視点を通じて「メディア」として「児童文学」を考察した。現代社会において「受動的」と見える「平和教育」に対し、「教育」の枠に囚われない「平和観育成」の手がかりとして、「児童文学」がどのように貢献できるか・関わる事が出来るのかを明らかにすることを目指した。

これに対して、2つの手段で研究を進めた。まず、先行研究を踏まえた文献と、戦前・戦後の児童文学資料研究を行い、これらから得た客観的事実や考察を明らかにし、更に戦時下で子ども時代を生きた方にインタビュー調査を行うことで、資料だけでは見えなかった主観的事実を明らかにした上で、「主体性」の追求を行えるようにした。

こうした作業を通じ、本論文では次の事を明らかにした。第 1 に、戦前・戦後の児童文学では、「メディアの二面性」の側面はやはり存在したが、それらは「コンテンツ」の同質化から見られる、ということである。これは、児童文学作品の内容が均質化してしまうことが、結果的に「情報」としての価値を追求したものになってしまうことで起こるものと分かった。

第 2 に、戦前、「モノ」として存在した「児童文学」は、「偏在」し、「都市」と「地方」という視点を踏まえると、「メディア」の形態は、ただ「モノ」としてだけではなく、「共

有」「共同性」などの目に見えない形態でも存在しうるということが分かった。

絵本や雑誌というモノとして存在した児童文学作品は、そのモノ自体が「遍く存在した」のではなく、都市や地方という環境によって、「偏って存在」し、子どもたちが実際にモノとして手にした、というわけではなかった。

しかし、この「偏在」の事実と、コンテンツの同質化と、戦時下の超国家主義的思想の蔓延から見られるように、そのコンテンツは、「モノ」のメディアを通してだけでなく、地方においては、人と人のコミュニケーション間など「共有」「共同性」という中でも広がった。このことから、「モノ」としての児童文学は「偏在」したものの、実際は「モノ」のメディアではなく、空間やコンテンツといった目に見えない形態であっても、そのものが「メディア」となっていたということが見えた。

そして第3に、「教育性」「娯楽性」という区分が生まれた戦後児童文学の流れの中で見えた事は、「教材」としての児童文学は子どもたちを客体としてみなすため、そこに「主体性」の眼差しが向けられていなかったということである。かつて子どもたちが遊びや娯楽の中に向けたような「主体性」が必要であり、その姿勢を構築させるような児童文学が、今後求められる形である、ということが明らかになった。

2. 奨学金の主な使途

インタビュー調査への御礼

広島県平和記念式典への参列への交通費、またその他資料収集の際の交通費
書籍代、コピー代

3. 卒業論文を書き終えて

インタビュー調査と資料研究と行う中で、偏りがちになりうる歴史的事実や資料に対し、中立的立場で捉える姿勢が非常に難しいものだと感じた。また、インタビューを行う中で「メディア」についての考察を深める結果となり、とても有意義なものになった。「歴史」をどう受け止め、どう学び、どう今に活かすのかを考えていく事は、難しいことだと改めて実感するとともに、現代社会だからこそ考え、答えを見つけ出すことが必要だと思った。

論文を書き終え、幼い頃見た、「ひろしまのピカ」という絵本をもう一度手に取った。私自身は、この絵本をきっかけに、原子爆弾について、戦争について大きな関心を抱き、主体的に考えるようになった。きっかけをもらったといえる。子どもたちがただ教えられるだけの「平和」ではなく、自分から考え、意見を持ち、行動しようとすることにつながるための「きっかけ」が現代社会には必要だと強く思った。私は将来、こうした事に貢献できる職に就きたいと考えている。

最後に、本論文を書く上での様々な資料収集やインタビュー調査等を後押ししていただいた、故川上宏先生とご遺族の皆様、最後まで優しく指導して下さった新倉先生とアドバイスをくれたゼミナールの友人、そしてインタビュー調査に快くご協力いただいた方々に

感謝の意を表します。本当にありがとうございました。